

小学校

あいてのきもちをかんがえよう

○目標となる資質・能力

思いやり・他者理解、コミュニケーション能力、思いや考えの表現力

○指導のねらい

感情による表情の変化を体験的に学ぶ活動をとおして、表情によって相手の気持ちを
感じようとする態度を育む

○準備するもの

「きもちさん」グッズ（ボード、顔のパーツ）×児童数

○教育課程、実施時期

特別活動

○留意点など

表情を豊かに表現できるように、温かい雰囲気づくりを心掛ける

展開例

	学習活動	指導上の留意点
導入 5分	1 どんな「きもち」があるのかを考え、本時の学習について知る	・どの「きもち」も大切な気持ちであることを伝える
	あいてのきもちをかんがえよう！	
展開 35分	2 「うれしいとき」「かなしいとき」「おこったとき」の場面を想起し、それぞれどんな顔になるのかを考えて、「きもちさん」を作る	・「きもちさん」グッズを配り、福笑いのように、3つのそれぞれの表情を順番に作らせる ・適宜、個別に支援をする
	3 作成したそれぞれの表情を見て、どんな特徴があるのかを発表する	・実物投影機等を使って、児童が作った「きもちさん」を見せるとよい ・気持ちが変わると表情も変わること気付かせる
	4 それぞれの表情の顔を試みる	・鏡を使って自分の顔を確認させてもよい
	5 ペアで「きもちクイズ」を行う	・ペアにしてお互いに表情から気持ちの当て合いをさせる
まとめ 5分	6 本時をふりかえり、感想を発表する	・表情を見て相手の気持ちを感じ取ろうとする意欲を高めるようにまとめる

○「どんな『きもち』があるのかを考え、本時の学習について知る」について

本授業案は、福笑いの道具である「きもちさん」グッズを使った活動をとおして、表情から気持ちを感じ取ろうとする態度を育むことを目的としている。最初に、「きもち」にはどんなものがあるのかについて児童に自由に発表させ、色んな気持ちがあること、どの気持ちも大切なものであることを伝える。その上で、多くの「きもち」がある中から、今日は「うれしいとき」「かなしいとき」「おこったとき」の3つの感情と表情について考えていくことを知らせる。

○「どんな顔になるのかを考えて、『きもちさん』を作る」について

「うれしいとき」「かなしいとき」「おこったとき」はどんな時か、どんなことがあった時にその気持ちになるのかについて児童に問いながら、具体的な場面を想起させる。その上で、「きもちさん」グッズでそれぞれの表情を作らせるようにする。

例 「うれしいとき」— 褒められた時、賞がとれた時

「かなしいとき」— 喧嘩した後、怒られた時

「おこったとき」— 喧嘩した時、物を取られた時、叩かれた時 など

○「作成したそれぞれの表情を見て、どんな特徴があるのかを発表する」について

「口が上がっている」という発表だけでは、聞いている児童にとっては理解しづらいので、実物投影機やタブレットPC等を用いて実物を投影したり、拡大した「きもちさん」ボードを使って実際に児童に操作させながら発表させたりするなど、視覚的に理解しやすい環境を整えておくとよい。「そうだね。怒ったときは目がつり上がっているみたいだね。じゃあ、みんなでやってみようか。せーの！」というように、表情ごとにその表情をみんなでやってみるようにして展開していくとよい。可能であれば「ちょっとうれしいとき」「すごくうれしいとき」と強弱をつけて表情を作らせることができると、より深い理解に繋がる。

○「ペアで『きもちクイズ』を行う」について

ペアを組み、片方の児童に3つのうちのどれかの表情をさせ、もう片方の児童にその気持ちを当てさせる「きもちクイズ」を行う。ペアで行うことが難しいようなら、教員が出題者になって全員に向けて出題し、児童に正解を発表させてもよい。また、可能ならば、「その表情の子に何て声を掛けてあげればいいのか」と問いかけ、その言葉を実際にペアの相手に言わせることができると更に内容が深まる。

○授業後の展開について

児童が作成した「きもちさん」ボードを教室に掲示するなどして、授業以外の時間でも表情と気持ちへの関心が持続できるような工夫ができるとよい。理解が深まったら、友達が「かなしいとき」、どうすれば「うれしいとき」の表情になるのかについて考えさせたり、表情以外（「しぐさ」「声の大きさ」など）にも相手の気持ちを察するための方法があることを伝えたりするなど、児童の様子や理解度に応じて更に展開していけるとよい。







